

横浜歌人会 会報 102*

横浜歌人会会報第102号

目次

特集◎第17回研究会

シンポジウム「詩歌の現在—詩・俳句・川柳・短歌がめざすもの—」

- * 01 シンポジウム記録
- * 16 シンポジウムに参加して … 朝井恭子／佐久間裕子／田谷幸子

- * 17 新入会員自己紹介 … 工藤こずゑ／後藤恵市／三枝むつみ
- * 18 会員歌集紹介 … 津金規雄 清水正子歌集『彗星番人』／渡辺礼比子 千々と久幸歌集『水の駅』
- * 19 横浜エッセイ … 井澤幸恵／鳴海宥
- * 19 新会員のご紹介&告知板

平成23年7月31日（日）午後1時からかながわ県民センター（横浜市神奈川区）で、恒例の横浜歌人会研究会が、猛暑の中、七十七名の参加で開催されました。

シンポジウムでは、現在第一線で活躍の詩人、俳人、川柳作家をお招きし、他分野のシンポジストとの間の討論を企画し、充実した研究会となりました。

〈概要〉

日時 平成23年7月31日（日） 13時～15時45分
会場 かながわ県民センター
主催 横浜歌人会

〈コーディネーター〉

千々と久幸（横浜歌人会代表委員）

〈シンポジスト〉

山本一步（横浜俳話会会長）

二宮茂男（横浜文芸懇話会幹事）

坂井信夫（横浜詩人会前会長）

吉野裕之（横浜歌人会副代表委員）

*

*

千々と 本日は私ども横浜歌人会の第十七回研究会にお越しくださいまして、大変有り難うございます。今回は初めての試みでございますが、「詩歌の現在—詩・俳句・川柳・短歌がめざすもの—」というタイトルで、それぞれの詩型の特質や詩型を越えてひろく短詩型としての詩のありかを探ってみたいと思います。

シンポジストとして、それぞれの分野から四人の代表をお招きいたしました。本日の進め方は、最初

にシンボジストのみなさんに約二十分程度の基調報告をお願いし、そのあとフリートーク、場合によっては会場のみなさんからもご意見を承けたまわろうと思っております。コーディネーターは横浜歌人会の代表委員というお役目上、私が務めさせていただきます。アーディネーター、コーディネーターという訳(笑)でございます。

私の方からシンボジストのみなさんに申し上げましたことは、事前にあまり予習をしないでお越しくださいませ、その場で思いついたことお考えになったことを自由にお話くだされば結構です、というものであります。

と言いますのは、この場で語っていただいたことがそのまま記録になる、という方々をお招きしたからであります。会場のみなさまもそんなおつもりでお聞きください。

シンボジストのプロフィールにつきましては、お配りした資料に詳細が載っておりますので、ご紹介は割愛させていただきます。

発言の順序は俳句の山本一歩さん、川柳の二宮茂男さん、現代詩の坂井信夫さん、短歌の吉野裕之さんの順序でお願いいたします。

それではまず山本さんから口火を切っていただきます。

よろしく願ひいたします。

【第一部・基調報告】

山本 山本一歩です。よろしく願ひいたします。

今日は、歌人会の集まりということで、私も短歌を作って参りました。

歌集は何冊か持っているんですが、自前で買った歌集があります。二十五年くらい前でしょいか、『サ

ラダ記念日』(河出書房新社、一九八七年)ですが、その中に「万智ちゃんを先生と呼ぶ子らがいて神奈川県立橋本高校」という短歌がありまして、私も作りました。「万智ちゃんはどうに辞めてはいたけれど娘も息子も橋本高校」。お粗末！(笑)

事実ですが、丁度娘が在学中に俵万智を呼んで講演会があるというので、私もトコトコ行つてその話を楽しく聞いてきたというような思い出が、ありました。

今日は短歌と詩を俳句にしてみようかと思つて、いろいろ書き抜いてたんですが、網膜剥離で一ヶ月間入院して、その計画がだめになりました。字がちつと読めない状態で、例句を引っ張り出すのに非常に苦労したのです。

六句目の飯田龍太。これはいまNHKラジオで「ラジオ深夜便」というのがあります。ラジオを聞いておりましたら、飯田龍太の俳句が出てきまして、「どの子にも涼しく風の吹く日かな」。ほんと「一月の川一月の谷の中」という玄人好みの俳句を入れようと思つたんですが、こんな俳句もあつたんだなと思つて、これに差し替えてしまいました。

二番目(*1)につきましては直近の作。いまだんな俳句が詠まれているかということなのですが、手近な所で私の出してる雑誌の「硯」の六月号に載せている句です。俳句の雑誌が私のところに毎月百冊弱くるんですけど、主宰、代表クラスの中から抜粋して載せるのですが、そのうちの四句と私の句です。

三番目(*2)の東日本大震災の話、俳句、短歌も結構いろいろな角度から詠まれてきた。いまも詠まれていると思うんですけど、俳句で震災を詠むとどうしても、他人事になる、或いはテレビ俳句にな

る。ということで、「作るんじゃないよ」「そんなのやめなさい」と句会の指導もしたんです。これは、「硯」六月号に投句してきた人が震災の当事者、息子さんを亡くされているんですが、こういう句はいい悪いを抜きにして、絶唱ですから、巻頭にとつたんです。こういう句を読むと震災は詠めない、当事者以外は詠んじやいけないんだという思いをここに載せました。

最後の四番目(*3)については、横浜に関連して、横浜俳話会では、五年に一度合同句集を出すんです。その中で、神奈川県を詠むという特集をし、今年の四月に出た合同句集の中から、横浜に絞つて五句載せました。

レジュメの一番(*4)に戻ります。前の四つと後ろの四つを分けたのは、俳句というのは、どうしても、その師系、誰に教わってますか、どの結社にいますか、という話に必ずなるんです。前の四つ、私の先生が小林康治、その先生が石田波郷、その先生が水原秋桜子、で、その先生が高浜虚子。いまの俳句の世界で先生を辿っていけば、大体高浜虚子に突き当たるのではないかと思います。

正岡子規が俳句革新ということをやった明治二十五年、俳句というのは、江戸期から、点取り俳句、蕉風俳句でやってきたところ、正岡子規がそうじゃない、これはいい、あれは悪いと俳句を分類した。

そこで、子規は新聞と雑誌を押えた。

江戸期からやっている人はなんか知らん若造がごしよごしよやっているわいと思つたんでしょが、子規のところには若い人がいっぱい集まってきた、結局そのマスコミを活用したところが残つていったということですね。その正岡子規が出した「ホトトギス」を虚子が受け継いで、まあ現代俳句のスター

トみたいになるんでしょね。

で、虚子のほうは、花鳥諷詠だの、客観写生だのと言いながら、どんどん作りなさい作りなさいとやったところに、水原秋桜子が待ったをかけた。ここに朝顔は他の季語じゃだめなんですかということ、朝顔は他の季語じゃだめなんですかということ、自然の真と文芸上の真というような論文（『馬酔木』昭和六年十月号）を書いて、虚子から分かれる。

その秋桜子のところに集まったのが石田波郷であったり、後ろのほうの山口誓子、加藤楸邨ですね。それぞれ自分の雑誌を持ちながらやってたということで、自然にそれは離れて行くんですが。飯田蛇笏にしても、もともとは虚子の「ホトトギス」にいたのですが、自然に離れて行って「雲母」が龍太に引き継がれたときには完全に切れている。まあこの辺は小林康治を除けば、大体、大家。

そもそもですね、俳句というのは入り口が非常に易しい。特に私が俳句に入ったとき、別にこれから俳句を作るぞという心構えがあったわけじゃないんです。

私は、岩手で育ってこちらに出てきたんですが、職場に入った時に職場の先輩がこれから俳句のサークルを作るから「お前やれ」と強制的にやらされた。三ヶ月くらい経ってから、毎月十句作るようになった。



山本一歩さん

たんですが、一年たちましたら、その先輩は「転勤だから、あとはよろしく」と出て行った。十五人ぐらいい残っていたんで、ほっとくわけにもいかないの、そのまま幹事役を続けていた。三年やると俳句は病み付きになるみたいで、一種の麻薬みたいなものです。

職場を離れたところで月一回集まっています、先生が、もう三年、四年になるからみんな上手くなったので、私の兄貴を紹介するから。兄貴は若いときに専門的に俳句をやったということで、暫くその人のところで指導を受けたのですが、その人が小林康治のところで、勉強していた。

そういう縁があつて小林康治のところについて、本格的にやるようになるんですけれど、初めて行った句会は、これは新鮮だったですね。何も知りませんから。

句会はまず、投句して、選句する。三十年やってる人も昨日始めた人も先生以外は全部平等です。

よかったのは、そのあとの蕎麦屋の二階で飲んだ二次会です。

「お前初めて来たんだから、先生の前に座りなさい」

「酒は飲むか？」という話になって。

「いやあ、飲めるかどうかかわからないけど好きです」

「酒は大いに飲みなさい。飲んで、俳句をすきだと思いなさい。そうやって、自己暗示にかけると俳句は上手くなるんだよ」と言ってくれまして、それをいまだに実践しています。

最後に、清算するときには、兵隊勘定と言ってましたが、頭割りです。それが、なんかうれしかった。当時、私は二十三、四で、仕事だつて半人前でしたから、そこで、一人前の扱いをされて、若いのは私一人でしたから。

当時はみんな若かった。先生が六十五くらいだったんですから、だいぶ、それ以下の人が多かったということですからね。いまでは考えられないようなことですね。そういうところで勉強したということなんです。

その小林康治が平成四年に亡くなり、私は康治がやっていた雑誌の編集やら、一周忌の集まりやらで、バタバタやっていると、跡を継ぐ人が、東大西だと手を挙げ、人がざざつといなくなっていくわけです。一周忌を終わって、同人誌を出そうというときには、五、六人しかいませんでした。

横浜から五、六人で雑誌を出したのですが、継続は力だといえけれど、なかなかそう上手くはならない、どうやれば上手くなれるのが非常に難しいです。

俳句は自得の文芸だということですね。自得というのは自分で得るんですけど、じゃあ、どこまでいったら、そういう気持ちになるのかというのは非常に難しい。沢山読んで、沢山作りなさいという話はします。いまでも、沢山読むことにはしているんですが、ただいい句を読んでないという意味がない。昔の人のいい句を何度も何度も繰り返し読みながら、それを、自分の作品に役立てていくということになるんでしょかね。ただ、先が見えないので、最後までやり続けなければいけない。

俳壇で難しいのは、これからですね。心配なのは、先生が亡くなると、番頭さんが雑誌を出す。その番頭さんが亡くなると、その雑誌の番頭役の人がまた雑誌を出す。非常に枝分かれして行く。なんとなく先生が小粒になっていく。まあそれが立派な先生ならいいんですけどね。

私も含めてですが、数が増えればいいっていうも

のでもないな。どつかで、なんか亀裂が生じてくるような感じがしないでもないですよ。

あとは、なんかありましたら、作品で直接触れるようにしますので、私の俳句の、入門から現在のところまでということ、終わりにさしていただきたいと思っています。

どうも、失礼しました。

千々和 山本さん、どうも有り難うございました。本日はシンポジストの方々には、基調報告の中で触れていただきたいテーマとして四項目を事前にお願ひしております。

それは、①横浜へのこだわり―風土と作品の関わりについて、②あなたの詩の分野における最前線の作品、③あなたの詩の分野におけるもつとも典型的な作品、④以上のほか、時間的な余裕があれば、他の詩型（ジャンル）への興味についても語ってください、というものでした。

さらに引用作品には、必ずご自分の作品を入れておいてください、ということも申し添えておきました。

山本さんのお話に自作が引かれているのは、コチラの注文（笑）であります。

続きまして二宮さんお願いいたします。

二宮 川柳の二宮茂男でございます。どうぞ、よろしく願ひいたします。

私、緊張するともあります。女性の方が多いと、余計、どもります。ゆつくりと話します、そう、自分に言い聞かせています。

今日のテーマは、「詩・俳句・川柳・短歌がめざすもの」、私は、不勉強で、川柳のことしかわかりません。川柳の現在、そこで川柳が目指すものというところから、話してみたいと思います。

今年、川柳発祥二五四年、三年ですか。現状は、「繰り返し川柳」の時代と言われています。「繰り返し川柳」の大きな渦の中に入ってぐるぐるまわっている。そんな状態だと現状を認識しております。今日もきつと、全国のあちこちで、川柳大会、句会、勉強会、教室が行われておりまして、そこで、多くの句が発表されています。そこに集まるメンバー、発表される句は、相変わらず、同じようなものと推測します。これが、繰り返し、繰り返し行われております。自分では、とっておきな、新鮮な句を送り出したつもりでも、ビックリさせるような句がなかなか出てこないのが現状なのです。そのことについて、皆さんが、あまり不思議にも思わないし、これで、いいのではないかというような感じで、「繰り返し川柳」をぐるぐるとまわっています。各吟社の主宰諸氏、大会の主催者もあまりそのことに、問題意識を持たない、そんなふうに、私は感じています。

六年間ほど、ある柳誌の編集発行を担当しまして、八十ほどの吟社から交換誌を恵贈していただき、こつちからも送るということで、かなり、他の吟社の作品を読ませていただきましたし、いまも、川柳大会、句会に、積極的に出向いて全国の作者、作品と接しております。そんな中で、そんな感じを受けています。

こんな現状認識で、それでは、どういふふうなところを目指しているのか、川柳の一句、一句が、どういふ方を向いて行けばいいのかというところで、私は、川柳の個性である「穿ち」の目を、更に、磨くことだと思っています。原点に立ち戻って、川柳の個性である「穿ち」、穿った目で句を書く、穿った目で句を読む、鑑賞する。そこが、ひとつの、「繰り

返し川柳」から抜け出していく方法ではないかと考えております。

穿ちの句を書くには、どうすればいいか。対象をじっくり見る、観察するのは当然ですが、表現方法として、具象の世界を、基本的には、誰が、いつ、どこで、何々をした。そのドラマを五七五のリズムに乗せ、文字にします。穿ちの目でドラマを書く川柳。嬉しいドラマ、悲しいドラマ、苦しいドラマを書くわけですけど、かなり似たような句になります。本人は一生懸命に、それを避け、新しい句を目指して作句しているつもりでも、出来上がった句を見ると、どつかで見ることがあるような、感じの句になってしまっていることが、往々にしてあります。そこを抜け出して、オンリーワンの句に仕立てるには、私は、句の中に、心象風景を書き加えることだと考えます。穿ちの句の中に、肉眼ではなく、心の目で見たものを書き加えることによって、他人様の句と違う、個性的な、オンリーワンの句が書けるのではないかと、そんなふうに、感じております。

穿ちというのは、文字通り、錐で穴をあけるといふ意味なのですが、表面的に見えることだけでは、川柳としては、面白くないのです。表面的にはとてもきれいに見えることでも、錐で穴をあけてみると、意外な醜さがそこに潜んでいる。そういう、真実の姿、その本質のようなものが見えてくる。そこを書くことが不可欠なのです。一般的に、ちらっと見た人は気づかないような事象を、穿ちの眼差しで見ると、それをつまみ出して見せる。句を読んでくださった方に、「なるほど。実は、私もそれを、言いたかったのだ」というような感じで、読んでくださった方と響き合う。これが、川柳の味わいではないのかなと思っております。

お手元にお配りしました資料の句を見ながら、このことを肉付けして参りたいと思います。

タイプAの句は、典型的な、伝統句というような句を集めたつもりです。そして、タイプBの句は、最前線の句で、心象風景が多かれ少なかれ、読み取れる句、というふうに分けたつもりです。

そして、タイプAの一番目の句ですね。「一生を一間足りない家に住み」。前田雀郎さんの句です。村田英雄さんの歌でしたかね。「九尺二間が振り出しで：」というのがあります。新婚当時は一間の暮らしでも、結構、楽しくやるわけです。間数はだんだん増えていくのですが、子供が増えてくるし、子供が成長するので、生涯を通して見ると、常に、一間足りない家に住んでいた。そういうような、穿った見方なんです。これは、衣食住の住に目線がありますが、やはり、暮らしそのもの、人生そのものが、常に、一〇〇%満足していない。なかなか満足出来なくて、いつの時代でもちよつと足りないものを抱えながら生きていく庶民の姿を、穿った目で、見ていると、私は読みます。

二つ目の句「友だちのうしろ姿の有難味」（川上三太郎）。今度、東北地方であの、大きな災害がありまして、家も流され、家族も失ったような、そういうような苦しみというのは、なかなか一人では堪



二宮茂男さん

えられない。そんなときに、誰に気持ちを打ち明けて、つぶされそうな気持ちを楽にするか、また、逆に、なでしこジャパンですね。ああいうふうに、キンキラに輝いた瞬間を、誰に伝えて、誰とその喜びを分かち合うかということなんです。男性の場合は、大方、お袋さんじゃないか、というふうに思うのです。そういうときに、心の内を打ち明けて、共に泣き合い、喜び合うのは、私は、お袋さん。女性の方はどなたでしょうかね。

三番目の井上信子さんの句「国境を知らぬ草の実こぼれ合い」。これは、勝手に人間が決めた国境その線を挟んで、いがみ合い、睨み合い、殺し合っている人間の姿をですね、草木はその目線で見ておられます。人間なんか、愚かなものだというふうな草木が言っているのではないかなとして、穿ちの句と読みます。

四番目の句、「貧しさもあまりの果ては笑い合い」は吉川雉子郎さん。吉川英治さんが、若いとき川柳をやっておられ、「かなり貧乏をされたのだなあ」というようなことなのです。私も、子どもの時、相当地い貧乏暮らしをしました。貧乏の底ではないがみ合うとかね、そういうふうな哀れな感じで、笑い合うというように貧乏の底に見つけて、それを引き出して、皆さんに、見てもらう、読んでもらうというのは、これはやはり、穿ちの世界だと思います。

五番目、「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」。これは、麻生路郎さんの句ですが、偉い人も、われわれのよいうな凡人も、また、大金持ちも、貧乏人も、そう変わらないよという。寝転ぶには畳一畳あればいいじゃないか。で、最後は、等身大の木箱の中に入って、あの世に旅立つて行く、「そんなに、卑下しなさんな」

というような感じですね。

そして、六番目の句は「老人は死んでください国のため」。これは、宮内可静さんの句ですが、この句を見覚えのある方いらっしゃるかもしれません。これは、平成九年の四月号の「オール川柳」という川柳雑誌の特選句だったのです。この句が世に出るや否や編集部には、まず、非難の声が圧倒的なボリュームで押し寄せました。「なんとという川柳だ」、「これは川柳なのか。これが文芸なのか」というような感じですね。そして、「作者はどういう男だ」そして、「この句を特選に選んだのはどういう考えか」、「編集部も編集部で、何故、大きな活字で世に送り出すのだ」というようなものでした。

そのうちに、五月になり六月になり、七月になる頃には、だんだん共鳴の輪が広がりました。非難をされた人々は、額面通り読み、評価したのですが、共鳴された方々は、穿ちの目でこの作品を読んでくだ

さいました。日本は長寿国、そして、曲がりなりにも福祉国家、年金も貰える。健康保険も皆保険。敬老特別乗車証も出る。家庭でも敬老の日に、子供や孫が、「おじいちゃん長生きをしてくださいね」とおべんちゃら言う。表面的にはとても素敵な長寿国も、本音は別だ。例えば、七十五歳以上の人々が、ここで、一斉にぱつといなくなると、この曇天の日本は、一気に、快晴になるのです。

時間が押し迫っていますので、Bタイプの四番目の句ですね。「三面鏡二面はすでに鬼である」。土谷正さんの句です。女性が、三面鏡を覗くのは、より美しくなるためですね。で、その三面鏡を覗いた

に委ねます。読者は、自分の人生を被せて、思いを凝縮させる。それが、川柳を読む楽しみです。この句は心象風景の中に、三面鏡と人間を配置して作句した。このようなスタイルの句は、類似句はないと思います。

最初に読み上げましたタイプAの句は、穿ちの句であつても、かなり似たような句が出来てしまう。先ほども、どなたかが、仰いましたけれど。川柳も初心者講座というのがありまして、私は、古川柳を含めて、いろんなタイプの句を百句ほど一覽にして提示し、学びの最初に、一句ずつ、輪読します。教室の生徒さんは、お手本句に似せて書く、真似て書くというようなところがあるのです。これが、「繰り返し川柳」の原因の一つです。これを、防ぐには一句、一句の中に心象風景を書き込むこと、「これが、いいのではないかな」というのが、私の考えなのです。

タイプBの一番目の句をちよつと見て頂きたいのですが、「黒いものがどすんとある どすんと」(中村富二)。これは、心象風景が一〇〇%近い句と思うのです。最初の、三面鏡の句は、まあ、五〇か、六〇%が心象風景、かなり、肉眼で見えるものと、見えないものが、ほどよく混在している。従つて、富二さんの「どすんと」の句を読んでくださった人は、何を言っているのか訳がわからない。作者は、読者に自分の心象句を伝えようと努力する。一方、読者は作者に心を寄せて、作者の心象風景から何かを読み取ろうと努力する。が、いくら、両者が近寄つても、ついにわからないで、「さようなら」ということになりかねないのですね。ですから、私は、心象風景を取り込むにしても、何%くらいが、まあ、心象・具象を「五・五」が、「六・四」のあたりがいいので

はないかと思つたりしているところです。

持ち時間が少なくなりました。自分の句も入れるとのこと、「ジャンケンに勝つて寺まで母背負う」(二宮茂男)。現在の川柳の九割以上は課題吟なんです。課題が出て、題を自分の中に引き込んで作句する。この句は「運ぶ」という課題で作った句でして、二百四十人くらい集まった京浜川柳大会で、「天」に抜いて頂いた句なのです。

そして、震災の句ですね。「累々と瓦礫 累々と無力」(千葉絹子)。時事川柳フォーラム、数名で作ったなかで互選第一位の句。

震災句は洪水のように発表されていますが、まだ、どれが残るのか、どの句がいい句なのか、まったくわからない。もう少し様子を見ます。

「悲しみを知つて笑いを深くする」(津田公子)は今年、六月十二日に仙台で、全国の川柳大会が開かれました、この句の作者は被災をされた方なのです。仙台で、評判になつていふことので書きました。

それから以前の震災の句というと「平成七年一月一七日 裂ける」(時実新子)。この句も、神戸で被災された方の句です。

そして、横浜の句、川柳は横浜というよりは、横浜に暮らしている人たちの悲しみ、苦しみ、嬉しさ、楽しさのドラマを書きます。横浜という地名で束ねるような句はなかなか見つからない。神奈川川柳協会会長さんの句を書かせていただきました。「異文化を育てて青き港の灯」(金子美知子)。ちよつと、時間をオーバーしてしまひまして、失礼しました。

千々和 二宮さん、有り難うございました。ひとつだけ質問をさせていただけますか。「老人は死んでください国のため」という川柳が非難されたとき、

「ヒザコウ？」と仰いましたか。共鳴されたあとの言葉が聞き取れなかったんですが。

二宮 ええ、私は、どう言つたのでしょうか。

山本 「ヒザポン」と仰つた。膝をポンと叩く。

二宮 ああ、その通りです。

千々和 ああ、膝をポンと叩くから「ヒザポン！」分かりました。川柳の世界でも、俳句の世界でも共通にある批評用語なんです。短歌でも使えそうですね。有り難うございました。

続いて現代詩の坂井信夫さん、お願いいたします。

坂井 まずはじめに、横浜へのこだわりです。

横浜には三十年以上住んでおりますが、作品との関わり、こだわりはほとんどないですね。もちろん、日常生活とか生活実感はたくさんあるんですけど、実際自分が詩を書くということになりますと、ほとんど関わりがありません。

もちろん僕だけじゃないんですけども、かつては出身地とか田舎とかそういうのが少年期あるいは青年期のことが、いろいろ浮かんでくるということが、詩に限らず、短歌俳句川柳、たくさんあると思います。簡単に自己紹介をしますと、私の生まれたのは、満州国の新京、いまの日本というところと東京みたいなところで生まれ育ちまして、敗戦の翌年に長野県の飯田市に引き上げました。その後、長崎県の諫早



坂井信夫さん

というところに高校を出るまでいまして、上京して東京の巣鴨に十三年くらい住んでいたんですけど、こだわりとか関りとかといえますと。やっぱり六〇年代の新宿です。

二番目に自分の作品を入れてくれということで、資料②に「蛇」(*5)という作品を書いておきましたけれど、一九八九年一月七日というのは、昭和天皇が死んだ日にちですね。そのとき一匹の蛇が満員電車の中をずるずると這って行くと考えましてね、一気に書いた詩なんです。散文詩ですけども、行替えがないだけで、ぼく自身は思想詩と考えてます。具体的に言えば、北村透谷とか先駆者がいるんですけど、戦後では、吉本隆明の作品とか、僕の先輩の菅谷規矩雄の作品を思想詩というふうに考えております。

「思想」と言った場合、もちろん、イデオロギーじゃなくて、行為、行動の原理としての思考として、詩を書いています。

詩を読んで、それでアクションを起こそうとかじやなくて、現実的な(普遍的な)思考として詩を、という思いはあります。

それから、三番目の典型的な詩ということで、中原中也を引用しました。

「風が立ち、浪が騒ぎ、／無限の前に腕を振る。」(「盲目の秋」・詩集『山羊の歌』文圃堂、一九三四年)。こういうふうに書ける詩人は天才だなっと思います。

それから、詩の場合、透谷以後百年くらいの歴史しか近・現代詩にはないんですけど、日本の近・現代詩は、抒情詩が中心になっている。抒情詩といった場合の「抒情」というのは、センチメンタルとかいうのかロマンティックとかいうふうですが、抒情捉えられたり、思われていると思うんですが、抒情

の「情」というのはナサケという意味じゃなくて、ココロという意味ですね。

それで、ひとつは戦前に四季派という一派がありまして。中心になったのは立原道造とか三好達治、丸山薫、津村信夫、小説家の堀辰雄なんかが入って、中에서도一応四季派には含めていいと思うんですけども。この四季派というのが、非常にずうっと人気がある。理由はエートスといいますか、精神基盤というか、日本民族のエートスというのが四季派の抒情性というものを支えている。

で、最初の資料①の「蛇行」(*6)という作品、メタファーを積み重ねていくことによつて詩を成立させるという修辭的な現在ですが、ひとつの成果としてここに表れているわけです。これが特に優れているとかいうことではなくて、一つのサンプルとして書き手が、「自分は蛇なんだ」とそういう意識がどういうふうなメタファーで、展開していくかをサンプルとしてここにかかげました。

詩を書くきっかけになったのは二十五歳の時に母親との確執、父親との問題、それから女との出会いと別れとかかそういうことがありまして、いちどきに僕の精神が心が袋叩きに遭った。で、そのときに、じゃあどうすればいいのかというふうに思ったんです。一つは自殺する。もう一つは誰かを殺す。もう一つは全部投げ出してどこかに逃亡する。それから、もうひとつは狂う。もう一つはキリスト教の信仰を持つ。でも、気がついた時には手元にあったノートに詩のようなものを書き始めていたんですね。

ですから、朔太郎の『月に吠える』(初版／感情詩社・白日社、一九一七年)に出会ってから十年の間、自分が詩を書くことなんてないと思ってましたんで。も

うどうしようもなく追い詰められたところで、夢遊病者のように詩を書き始めたのです。それが二十五歳だったんですけども、自分の体験とか自己表現が、テーマとかモチーフになったんです。十年後の三十五歳の時にまた、別の事件に巻き込まれて、その時は、やっぱりどうしようもない状態に追い込まれて、そこから、自分の事だけ書いていてもしょうがない。いまは対幻想、共同幻想というモチーフを展開しています。

僕にとつてもつとも関心があるのは、出来上がった作品についての評価とかではない。例えば一本の木を表現する人間に譬えて言うならば、一番大切なのは根っこですね。根っこは泥の中です。土というのは何かと言いますと無言とか、沈黙とかそういうものが根っこを育てていくものですね。

無言や沈黙というのは、おそらく誰にでもあるんですけど、それは九九%の人が、そのままに生涯を終えていく。残りの1%の人は無言とか沈黙とかいう養分を吸い取り、叫びとか呻きとなし、そののち言葉を獲得していくという段階があります。

現象的に見てみますと、例えば詩壇とか歌壇とか俳壇とかを見ますと、花が咲いたり葉が繁るということは、ごく末梢的なことです。僕は「少年の闇」と名付けているんですけど、それは「あの日どうして、自分がそういう目に遭わなければならなかったのか」という問いが、根源的にありまして、それに、自分で答えられるかどうかということがいつもあります。

千々和 有り難うございました。それでは最後になりましたが、短歌について吉野さんお願いいたします。

吉野 千々和さんから出たとこ勝負でというお話が

ありましたが、私としてもありがたいことです。ライブ感を楽しみたいと思って、全然考えてきていないんです。

私自身についていうと、いまなんだか自由な感じがしています。これまで二十年以上にわたって、短歌と俳句に関わってきました。多くの方と同様に、結社に所属し勉強してきましたが、俳句は十年ほど前に、短歌はこの三月に無所属になりました。つまり完全に無所属。自分がしっかりしていれば、どこに所属していても自分というものはあるわけですが、離れてみると、これは経験してみないと分からないです。その自由さがプラスに働くのか、マイナスに働くのか。まだ数ヶ月のことなのでよくわかりませんが、今日はその自由な感じで余計なことを言わなければいいなと思っています。

レジュメをご覧ください。千々和さんからの宿題に対して、ひとつひとつかなり真面目に答えてしまいました。ちょっと恥ずかしい感じもしないでもないです。とは言っても、頭の中というか、体の中にアルコールが入った状態でまとめたので、ちょうどいいかもしれません。理性が働きますと格好つけてしまうんですね。理性がある程度、完全になくなってしまうとまずいですけど、まあ半分ぐらいなくな



吉野裕之さん

った状態で、キーボードを叩いて作った資料です。

「①横浜と私」。横浜と自分の作品との関係を言っておりまして、二つのことを書いています。一つは「Made in Y」のこと。私のホームページのタイトルですが、Yというのは、吉野のYであり、横浜のY。母方の先祖代々根岸なんです。そこに生まれ育って、横浜というのは私にとって非常に大きな存在としてあります。

もう一つは神奈川県歌人会の会報（第三十四号、二〇〇八年九月）に書いたものの抜粋です。根岸に絞って書きましたが、根岸は、昭和四十年代に埋め立てが進んで平地がかなり広がりましたが、それまでは狭い範囲に丘と平地と海がある、そんな土地でした。狭い範囲にいろいろな地形的な特色が同居していますから、空間的な壁があって、そして同時に時間的なものもいろいろ折られたまれている。白滝不動尊の滝とか七曲りとか、横浜にもこんなところがあるんだ、といった風景を抱えていて、あるいは昭和五十年代までは米軍の住宅地がずっと広がっていたり。古いものと新しいものが同居する、多様なものが混在する、あるいはいろいろな時間が交差する、そんなまちです。そこで生まれて育った。そのことは私の中で強く働いているんだろうと思っています。

短歌はやはり韻律だと思っています。韻律を、横浜なら横浜、根岸なら根岸という土地が育んでくれた、くれている。そう思います。ただ、横浜や根岸を直接詠み込んだ作品は非常に少ないです。

「②短歌の最前線（短歌の柔軟性）」。十首ほどあげています。読んでみます。

喰ひのこされるまでゐてどうだったのかザリガニらの缺のびいす
肉親と知りつつあとを歩みゆくデパートの前の少

平井 弘

し空白
百々登美子

ゆふぐれの銀座を行けばこの通りもあの通りも火事のごとき夕焼
王 紅花

階段を昇り来る人頭より順にあらはれ今日春の靴
小笠原和幸

両脇に友達の居て人質のやうな息子とすれちがひたる
花山多佳子

しやわしやわと陰囊ホデシの髪洗ふときうしろに大きな冬の夜がある
岡井 隆

ブランコの板をかかえて目をとじて（嵐の海で船はこわれて）
やすたけまり

どの虹にも第一発見した者がゐることそれが僕でないこと
光森 裕樹

四月には桜並木が白じろと街を流れて光ばかりなり
秋山 律子

からだがない朝の newspaper に鳥の話題と誕生のこと
自作

次の③もそうですが、近くに置いておいた歌集や雑誌、あるいは書き抜きしておいたものからピックアップしました。いま気になっている作家や作品、ということだと思っています。

最前線というお題ですが、なにをもつて最前線とするか、非常に難しい。テーマや素材、あるいは修辭的、技術的なもの。これらからも議論は出来ると思います。しかし、そういったことも含めてなのかもしれないけど、一首としての存在感、一首としての手触り感、トータルな感じのありよう、たまたまいが大事だと思うんですね。

短歌は千三百年の歴史の中で鍛え上げられてきた五七五七七を基本とした音数律の詩。千三百年の時間を経た柔軟性、それはそう簡単に壊すことは出来ない。そこにわれわれが、われわれの時代を通して

何かを付け加えていく。短歌はしたたかさとしなやかさを同時にもっている詩型だと思っています。それを「短歌の柔軟性」といったわけですが、それぞれの作品についてうまく説明は出来ません。直感的に選んだんですが、なんて言うのかな、ふわふわとしたふにやふにやとしたといった、そんな感じも含めて短歌というのはしたたかで、しなやかで、壊すことが出来ない柔軟性を持った詩型。そういうところに短歌の最前線、短歌という最前線がある、といったことを感じています。

「③短歌の典型（短歌の基本形の豊かさ）。同じく十首あげています。先ほどと同様、読んでみたいと思います。

花育て草抜き落葉掃く日々を重ねて青年と呼ばれずなりぬ
大下 一真

包丁の砥にし当つれば花冷えの今日のひと日がす
石田比呂志

雨ふりて雨あがりたるいちにちにありしさまざますでに遙けし
桑原 正紀

かなしみという結晶の過ぎしよりすべての朝ははじまる重く
三枝 浩樹

馬の尻のやうな匂ひの風が吹きぼつりぼつりと雨が降り来ぬ
時田 則雄

忘れし帽子のごとく置かれあり畳の上の晩夏のひかり
内藤 明

自転車洗われて細き骨組みの息づく夏の光の雫
源 陽子

娘の買いいし大きなチェロは運ばれて二階はゆたかな楽器となりぬ
関谷 啓子

工夫等の鐵路にかざすハンマーの揃ひて光る春の晝かも
加藤 克巳

黒板に黄金の文字書きたくて揺れながら待つその

一瞬を

自作

先ほどの②と比べてどこが違うのかという、なかなか分かりにくいと思います。仮に②と③を逆にしてレジュメを作ったとしても成立するのではないか、そんな感じもしています。「短歌の基本形の豊かさ」と「短歌の柔軟性」。実は同じことなのかもしれません。つまり短歌の典型と短歌の最前線というのは、簡単に置き換えることが出来るのかもしれない。繰り返になりますが、それが千三百年の時間の中で鍛え上げられたしたたか、しなやかさなのではないか。

「④ジャンルをめぐって」。お隣の詩型に対する興味や関心というお題です。三つのことを書いています。まず三つ目ですが、『セレクション歌人 吉野裕之集』（邑書林、二〇〇八年）のあとがきの一部です。五、六年前でしょうか、JR新橋駅の地下の横須賀線のホームではと気づいたんです。「短詩型と都市は双子の兄弟ではないか」。このフレーズがふつと降りてきた。ああ、なるほど、と思いました。二十代の頃から、短歌、俳句、都市Ⅱまちづくり、NPO、あるいはアートやデザインなど、いろいろな領域に関わってきた、分裂せずに一人の人間の中でなんとかやってきた。自分でもずっと不思議だったんですが、やっとわかった。それに、いろいろなことをやっているのはなんだかいけないような気もしていたのですが、これでいいんだ、という気持ちになりました。

一つ目と二つ目に戻ります。アルコールの勢いでちよつと突つ張った感じになっていますが……。詩歌というのは、人間にとつて最初の表現方法ではなかったか。最初は「ああ」とか「うう」とか、そういう音声だったと思いますが、そこから詩歌が生まれる

た。しばらくするといろいろなジャンルに分化し、また制度化も進む。制度は物差しを提示したり、規制を行ったりする。しかし同時に、制度からの逸脱、あるいは輪郭や境界といったものの揺さぶりは常に試みられていたはずで。当然ですが、こうした試みなどは自らの利益を追求することとは無縁のこと。おそらくお隣の詩型に対する興味や関心ということではないように思います。「ジャンルは仮のものに過ぎない」と書きました。開いておくことが大事だと思っています。

最後に、今回の東日本大震災についていうと、詩歌の役割というのは、メッセージを直接発信することではないと思います。「がんばれニッポン」というのは大切なメッセージです。しかし、それは詩歌の役割ではない。詩歌というのは、ものとかことに関わることによって生じる感覚、その感覚の核そのものを記述すること。そして、それによって痛みやかなしみが救われる、そういう作品を提示していくのが詩歌の役割なのではないか、そんな風に考えています。

千々和 吉野さん、有り難うございました。各シンポジストからいくつかの論点が提示されましたが、ここで十分間ほど休憩を入れたいと思います。とりあえず前半（第一部）はこれで終了させていただきます。

【第一部・討論】

千々和 ここまでに四人のシンポジストにそれぞれの詩型に対する基本的な考え方、スタンスをお伺いいたしました。そこでこれまでのご意見を整理し、ディスカッションのテーマを絞っていききたいと思います。

私から三点についての総括と、問題提起をさせていただきます。

最初の問題は詩と風土との関係ですが、これにつきましては吉野さんからお話がございました。吉野さんの場合は横浜というよりは生まれ育った根岸に対するこだわりといいますか愛着で、根岸という景観、風土、雰囲気、韻律を育んだという興味深い自己認識が披露されました。

ただ他の三人は横浜という風土に対して割合冷淡というか、関心が薄いんですね。山本さんは岩手のお生まれだし、坂井さんも新京から諫早まで各地を放浪(?)し、横浜に辿り着かれたという感じですが



コーディネーターとシンポジストの皆さん

ね。二宮さんは横浜のお生まれですが、風土よりは人間の喜怒哀楽の方に興味があるということ、どうも横浜が詩を産む契機にはなっていない感じがします。吉野さんを除いて、少年体験が人間を育むといった体験が薄いんですね。

そこでこの問題はこれ以上深入りしないことにして、二点目の問題に移ることにいたします。二点目は震災の問題であります。つまりは東日本大震災、世は明けても暮れても震災の話題ばかりですが、これを詩歌の側からどう受け止めていくか。それをお伺いしたい。

そして三番目は自作品の自注。なぜこんな作品が出来たのか、作ったのか。その狙い、背景、その時の心境などを、虚実織り交ぜながら語っていただきたい、そんなふうに思っております。

三番目の問題につきましては、坂井さんの「東日本大震災を作品化するつもりは永久にない」という休憩時間の立ち話が手掛かりであります。吉野さんからも「がんばろう日本」というメッセージはない、というお話がありました。

これは四人の方にお伺いしたいと思います、まず山本さんはいかがですか。

山本 そうですね。

震災、吉野さんの意見に賛成ですね。例えば仮に瓦礫のそばに水仙が咲いていました。そういう句を作る。その水仙が、じゃあ、タンポポじゃだめなのか、春だからという植物があるでしょうね。そういうことになるわけですね。

瓦礫が震災を表しているかということもあるだろうし、瓦礫に付けるとすると何でも良くなってしまう。そういう意味合いから震災の句は作らない方がいいですよ。けっこう、いろいろと出てきましたよ。

要するに東大震災が秋で、阪神大震災は冬ですね。今回の東日本大震災は春です。ですから、震災というような言葉を使っても、どの季語でも一句になっちゃう。結局その場に行っていないので、それを、なんか、ということなんです。テレビでも作れるし、新聞読んでも作れる。それぞれ、あまり、俳句としての存在価値がないんじゃないかなと思うんですね。私が挙げた、長瀬さんの句というのは、息子さんが亡くなられたのです。こういう句を作られると、もうどうしようもないんですね。「春霽」が、春の霽が動くんじゃないかなと言ったとしてもですね。本人にはもう、そんなことは全然関係ないですね。ですから、こういう作り方をされたら、瓦礫がどうの、余震がどうの、或いは、なんでしたっけ、皇后さまが貰った水仙を抱えて飛行機から降りてきたとか、そんな句を作った人もいましたけど。所詮報告でしかない。ということから、そういうのは当事者だけが作って、ほかの人は黙って見ているほうが、いいのかな。

やっぱり他人事で、まあ、作らない方がいいような感じがなあというふうに思っております。

千々和 はい、有り難うございました。では同じ質問で、二宮さんお願いいたします。

二宮 今日の資料の中に震災の句を三句入れてあります。いま、大会、句会など、一般川柳にも、震災に関する句がたくさん書かれています。これからも、書かれるでしょう。日常茶飯、暮らしの中の喜怒哀楽を句にする、川柳ですので、当然と考えます。

そして、私も時事川柳という分野にも関わっているものですから、私も、何句か作りました。更に、これまでの新聞の句、それから柳誌等に発表された震災に関する句をメモしております。いまは、アイ

エヌジイ(Enji)の時ですので、まだまだ、どういう句が後に残るかわからないです。秋になるか、もう少し時間がかかるか、この度の震災に、川柳がどういうふうに関わったか、どういうような句を残したかというのは自分なりには検証してみたいと思います。

いま、山本さんからのお話で、当事者というような話が出ました。体験をされた人の句と、それを見たり聞いたりした人の句は違います。先ほどの「悲しみを知って笑いを深くする」という句にしまして、被害に遭われた方の句だと聞くと、句への思い入れが深くなるような感じを受けるのは、確かなんですね。自分自身がその悲しさに引き込まれていく感じですよ。川柳作家にとっては、とても大きな悲しみ、辛さ、苦しさ、ですので、被害に遭われた方の句は当然ですが、親族の方の句、友人の方の句、それから、第三者の句と、分けて整理してみようと考えております。以上です。

千々和 はい、有り難うございました。

じゃあ、坂井さんお願いします。

坂井 僕が感じたのは、どうして自分は書かないのかということ。僕が被災者ではないし、傍観者でもないということが勿論あるんですけど。文学はなにを目指すかと考えますと。今回の震災というのは要するに一人以上の「死」、或いは行方不明、いわば人間の死というものを量として捉えている。あるいは被害や被災の大きさというもので捉えている。でもそれは、政治的あるいは社会的な視点であって、文学の視点というのは、そういうふうな死者の多さとかあるいは被害の大きさとかということを対象とすべきではない、ということが、僕には基本的にはあります。それを作品化されることは、ご自由なん

ですけれど、僕はしたくない。

そういう意味では、例えばアウシュヴィッツのホロコーストとか、あるいは東京大空襲で十万人が亡くなったとか、そういう死者の量とか事件や災害の大きさによって対応しようとする、そういう視点自体が文学にとってはちがうんじゃないかな。あるいは、団地のすみっこでひっそり亡くなって、いつか発見されるとかいふふうな。あるいは三万人の年間の自殺する人には個々の三万の理由があるんですね。そういうことを考えた場合には、確かに震災がものすごいことではあっても、即座に反射的にそれを作品化する。俳句や短歌はもちろん詩でもやりますけれど。そういうことを僕なんかは、したくない。もちろんそれは、自由でいいんですけど、僕はしたくない。という感じだと思います。以上です。

千々和 有り難うございました。坂井さんのご指摘の根っこには、文学は何を目指すかという基本的な問題が横たわっているように思えます。さつき吉野さんが仰った、痛みや悲しみを言葉にすることに よって救われるという側面もその通りだと思いますが、今回のような事態に直面すると政治的、社会的関心の方が前面に出てしまいがちです。

三月十五日に朝日新聞が、「東日本大震災を詠む俳句・短歌を緊急募集」という広告を出しました。私はなんとふざけたことをするのかと思いましたね。この国が未曾有の災難に直面しているただ中に、たかだか個人のカタルシスに過ぎない俳句や短歌にそんな荷を負わせるのは筋違いだと。まあそうは思ったんですが、これが新聞のまっさき善意から出たものであるのなら、俳句や短歌にもそんな力があると期待されているのなら、そう頑なになることも無かるうと思いいました。

短歌には坂井さんが仰ったような、目新しい事態にすぐマスで反応するダボハゼのような作品もあれば、周囲に煽てられて体制の片棒を担ぐ作品もある。また山本さんの仰ったような当事者としての切実感の無い他人事のような作品もある。言葉によって同胞を激励し救出しようとする努力があるかどうかは別に、この際、短歌の胃袋の大きさを見守る他にないと思いいました。

時間の関係でこれ以上は踏み込まないことにいたします。坂井さんにご自分の作品を含めて、今日引かれた詩についてコメントをいただきたいと思っています。

坂井 長田さんの作品は先ほど申し上げたとおりです。現代詩というのは暗喩の、メタファーのところに 行ってしまうと、これ以上行きようがないというのか、メタファーの先に何か来るのかという、そういう可能性というか、不可能性というものが、こういう作品に表れてきている、と思います。

それから、中では先ほど申し上げたことですが、関連していいです。例えば俳句ですと、さつき山本さんが仰ったような、加藤楸邨とか波郷とか草田男とか、そういう昭和一〇年代から二〇年代にかけての作品というのは、さつき言った四季派と通底している日本のエートスだと思う。そこから、ずっと太平洋戦争に雪崩れ込んで行くと、「天皇陛下万歳」みたいなところに行くと、戦意を高めるような俳句、短歌、詩というものが、生まれてくる土壌にもなっています。そういう日本人のエートスというものを僕らはもつと見ていきたいなあと思います。

それから、「蛇」を書いたのはさつき申し上げたように天皇制の持っている不気味さというものを、満員電車の中、つまり日本という国家の中を、ずる

ずると這って行く、それを象徴的に書いたんです。その、満員電車の中の国民、われわれが、どういふふうに反応するのか、そういうことを象徴的に書いた。むろん一〇〇%、フィクションなんです。

それからちよつと、短歌の方に伺いたいのは、天皇制というものをどうとらえているのか。もちろん短歌と天皇制というふうな問題はみなさんの間でいろいろ議論があったと思いますけれども、そのへんのことを、伺いたいなと逆に思います。水野昌雄という方が、月刊誌の「短歌」に書いているんですけども、天皇在位六十年記念特集というのを短歌の雑誌でやったのを見て、一九七五年に坪野哲久が、それ以来、歌壇から一切離れてしまう。反天皇制という視点を持つている。天皇制についての短歌を書いて『氷河』という歌集にまとめたという。そういう、日本人が非常に、もつとも不気味な存在であるにもかかわらず、なぜ戦後民主主義と言われている現在でも天皇制があるのが当たり前というような日々を過ごしていることに關して、僕なんかは違和感を覚えてる。そういう人間の、あるいは日本人のあり方というものに根源的な疑問というものがあるわけですね。これも、塚本邦雄が『日本人霊歌』（四季書房、一九五八年）のなかで、「日本脱出したし皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係も」という一首を作っておりまして、それについて、島内景二という人が、彼は短歌を志した当初から、天皇が主宰する歌会始の対極にある短歌を作ろうとした、と書いているんです。ところが紫綬褒章などを受けている。そのところを、短歌の人たちはどういう議論をしているのか伺いたいたいと思います。

千々和 いま蛇から天皇制に話が移ってきたんですけど、坂井さんの「蛇」を拝見しましてね、私は

実は電車の乗客も最後は蛇になっちゃうんじゃないかと不気味な感じがしたんです、己の中にも蛇がいるんじゃないかと。

詩の中ほどに「…鎌首をもたげると赤い舌をちろとろ炎やしながら涙をながした」とありますが、これはどんな涙なのでしょうか。

坂井 例えば、天皇が被災地に回って慰めの言葉をかける。これはもう戦中からそうなんですけれど、国民のために平和を祈っているとか、しょっちゅう言うんですけど、それは僕は嘘だと思うし、ここで流された涙も嘘だと思うんです。それを逆に、アイロニーとして書いたんです。

千々和 ああ、なるほど。黙殺されることの涙かとも思いましたが、もつと積極的なんですね。有り難うございました。

さてそれでは短歌と天皇制の問題ですが、これは吉野さんにお答え（笑）をしていただきましょう。

吉野 難しい問題なので丸投げしている、という感じですが…。実は天皇制というのはよく分かりません。私が生まれたときから天皇制はあるんです。むろん、私が生まれたときからとかいう話ではないわけですが、私からすれば、私が生まれたときから、あるいは物心ついたときから天皇制はある。そういう制度がある。日本には大統領という制度はなく、内閣総理大臣という制度がある。この制度なんです。まったくイコールというわけではないけれど…。私は千々和さんが問題にしたいところをうまく感知出来ない。

私に即してもう少し言うと、私にとって天皇という昭和天皇が非常に大きい。私は昭和三十六年生まれなので、物心ついたときはおじいちゃんでした。若い頃の写真を見たりはしているけど、やはりおじ

いちゃんというのが昭和天皇です。生物学者の側面ももったおじいちゃん。私が二十代半ばのころ、昭和天皇は大きな病気を抱えて、皆さんも覚えておられると思いますが、連日、「下血」という言葉を聞かされた。天皇が血を流している、天皇という身体が血を流している。すごく不思議な感じがしました。

短歌と天皇制についてといわれても、私の中には何も生まれないんです。レジュメにも書きましたが、私にとって短歌は現代アートのひとつの領域なんです。多くの方が短歌と天皇制について考えておられることはわかっています。しかし、それに対して私は何をいえばいいのかわからない、というのが正直なところなんです。

千々和 吉野さんの天皇体験は、ある世代の感性を代表しているんでしょうね。坂井さんとか私の世代は、もつと屈折しています。歌人サイドで切実な問題は、かつて六〇年代に反権力の立場に立つて前衛短歌運動を主導した歌人が、たかだか三十年経つか経たないうちにいと簡単に天皇家に入っていくんです。歌会始の選者として。

天皇って権力の根源に位置する仇敵だったんじゃないんですか。あの当時、前衛短歌運動と社会運動Ⅱ反体制勢力は呼応して展開されたんですよね。それが季節が一巡りすると国から勲章を貰ったりして、宮内庁御用掛に収まる。

これを変身と見るか裏切りと見るか、まだ天皇家からどんなお土産を下げて来るのか見ていませんので明確なことは言えませんが、短歌の胃袋の大きさをここでも見せられた感じがあります。

吉野 選者になってくれ、といわれたら、私は喜んで引き受けます。NPOをキーワードにお話すると、NPOというのは、行政と企業に対する考え方です。

これまでのわれわれの社会は、行政と企業を中心に担ってきた。でもそれでは解決出来ない複雑な問題がいろいろ生じてきていて、行政セクター、企業セクターとは異なった原理のNPOセクターという考え方が生まれてきたわけです。ただここで注意しなければいけないのは、行政と企業が否定されるべきものではないということです。

それと、ある個人がセクター間を移動することはとても有意義なこと。優秀な人材であればあるほど、その人が移動していくことによって、それぞれのセクターが耕されます。原理の異なるセクターを移動するなんてありえない、と仰る方もいるかもしれませんが、大切なのは、それぞれのセクターが耕されることによって、社会全体が豊かに膨らんでいくことだと思います。

むろん、すべての個別・具体のものごとが、このようにきれいに整理出来るわけではないですが、一つの見方としてあるのではないかと思います。

野崎美智子 私にも発言させてください。

千々和 はいはい、どうぞ

野崎 私、つくづく思うんですけど、世界中を見回しまして、大昔から、天皇制というものが、連綿と続いていて、それが、奉つてあつて、その下に施政者がいたわけなんです。最初は貴族であつたり、藤原氏であつたり、いろいろ日本の歴史が変転しているのに、天皇というのは揺るがないんですね。その位置を保っているんです。こういう国は私は、世界広しといえど日本しかないんですね。ですから、こういう難しい問題を急に論ずることって出来ないんじゃないか

なんか日本の民族性の中にそういうものがあるんじゃないか、ちよつとそんな気がします。以上です。

千々和 少なくとも六〇年代まではあるいは六〇年代を思想の原点に生きている人は、ある価値観に対する節操みたいなものがあつたと思うんですよ。でもそんな節操じたいがいまはなし崩しになつている、そんな時代を私たちは生きているんじゃないか。だから何をしようとする自由なんだという、アナキーでニヒリスチックな空気が濃厚です。

うっかり節操などと言えば、時代錯誤になりかねない。六〇年代の尻尾つてやつは不自由で厄介ですよ。

坂井さん、これまでのところでなにかお感じになつたことを仰つていただけませんか。

坂井 やつぱり、天皇制というのは一種の宗教というか、宗教的な存在だと思われれます。ですからみんなが、キリスト教だつたら日曜日に礼拝をするとか、というようなことはいいですけども。どつかで、心の隅で、礼拝はしないでもそれを、みんなで容認しているというような、そういう存在だと。要するに、鶴たづなといいますが、非常に不気味な存在であるにもかかわらず、戦後は象徴天皇となつた。実際には政治的なことに直接かわりはないように見えて、なにか、例えば大臣が変わると、天皇から任命が下るといふうなことがいろいろあつて、いつの間にか空気のように国民の中に浸透している。

千々和 まったくその通りだと思います。会場の方で、なにか、この問題について、カクシンのご発言なさる方おられますかね。

吉野 カクシンつてどっちのカクシン？

千々和 己に対して確信を持つて。(笑)

山本 句会の後で流れて飲み会に行くんですけど、政治と宗教の話はするなよ、と言われました。作品と直接関わりのないので、なるべくやらない。お酒

を飲んでそういう話を始めるとやつぱり、終わります。せん。

千々和 なるほど、もう少しやりたいんですけどね。ちよつと時間の問題もありまして、先に行きますが…。

では、山本さん恐れ入りますが、ご自身の作品の周辺について、ひとつ、仰つていただけますか。

山本 私の句ですが、「鈴蘭と庭石と触れ合うてをり」という句ですけれど、これは、句会で「鈴蘭」という題が出まして、持ち寄りで何句かもつてきて、その場で何句か作るといふようなパターンなんです。



会員以外の多くの皆さんにもご参加いただきました



4つの詩型の交流を図った半日でした

俳句をうまく作るコツというのがありまして。反対のものを取り合わせるんです。遠いもの近いもの、高いもの低いもの、硬いもの軟らかいもの、そういう正反対のものをぶつけるとですね、これが、意外と上手くいく。ということなんですね。一番解り易いのは遠いもの近いものなんでしょうね。「遠山に日の当たりたる枯野かな」。遠山と近くに広がっている枯野を取り合わせる。

私の句は鈴蘭で、「鈴蘭」「鈴蘭」「鈴蘭」と考えるわけです。どこを思い出したかというと私の生まれた岩手の家の庭に鈴蘭とそこに庭石があるんですね。そんなのまあ意識して見たわけではないのです。

が、鈴蘭と庭石と、あとは、ものを提示すれば俳句ってのはいいわけで、じゃあ、鈴蘭が庭石にもたれかかっているような感じで作つたらいんじゃないのということ、で、「触れ合うてをり」というような作り方になったわけです。俳句って余計なこと言わないので、例えば二つのものを出してそれがどうしたということ、あとは読み手に任せるといいうようなところがあるので、俳句としてはこんな感じののかなということですね。

一番最後の句、横浜なんです。「秋を惜しむために来てゐる港かな」。私は岩手で十八年、東京で、独身時代があつて七年、そのあと、横浜、弘明寺で、十年いました。そのあとは相模原にずっと住んでるんですけど。弘明寺の十年というのがやっぱり子供が生まれる時期もあつてですね、弘明寺って、意外と下町で田舎田舎していて、縁日があつて、非常に好きなんです。大岡川の桜もきれいですし。勤めも横浜市内で十一年勤めて、川崎十一年、あとは他の神奈川県内で十三年くらい勤めてましたんで、横浜も山下公園のところに通算四年くらい居たんです。で、港というと山下公園となるわけです。

ですから、ここに並んでる句もそうですけど、地名とか、あればわかるんですけどないのはどうやって作つたか判らない。本人は横浜で作つたよって言うてるわけです。一つのこだわりと言いますか、例えば港、秋を惜しむためにはどこがいいかな、ああ港がいいな。というそういう単純な考え方なんです。やっぱり、好きだからこういうフレーズが出てくるんだらうと思います。

五年前に「神奈川を詠む」ということで、出したときは、横浜の至る所で句をつくりました。やっぱり必ず山下公園ですね。これからたぶんそういう

作り方をするんじゃないかなと思います。以上です。
千々和 有り難うございました。時間の関係で二宮さんにお伺いしますが、「ジャンケンに勝つて寺まで母背負う」で思い出しましたが、この間、新聞で池田澄子さんの「ジャンケンに負けて螢に生まれたの」という俳句を読んでびっくりしました。俳句ってここまでやるのかと…。

たまたま素材は同じというだけですが、川柳の側からご覧になっていかがですか。どこが違うんでしょう。

二宮 違いですか。俳句が分からず、うまく違いを説明出来ないの、自句自解。私の句は、三十三歳で五人の子を残して勝ち目のない戦争へ父を送り出し、窮地に立った母と共に苦労を重ねた子の日々、その母の晩年の介護は、長男の私にお任せくださいとの心意気の句。ジャンケンに勝つて、喜んで、進んで務めるのですよと言いたかったのです。実際、家庭で看取りました。川柳は、省略の文芸。読んでくださった方が、そこまで読んでくださるかどうかは問いません。

千々和 どうも有り難うございました。まだまだお伺いしたい問題が残っておりますが、時間になってしまいました。吉野さんの作品につきましては、二次会でご高説を承りたいと思います。(笑)

全体を通じて有意義な問題が出掛かったところで時間切れになり、誠に残念でございます。いささか中途半端ではございますが、これで閉めさせていただきます。

長時間ご静聴をいただき、またご協力をいただき誠に有り難うございました。

「註」

*1

つかず離れず白鷺と耕耘機（島村正）
さくら充つ水のやうなる闇まとひ（宮坂静生）
花嫁が来る路の臺ほこほこと（和田順子）
初蝶の触れたる岩震へけり（柴田佐知子）
鈴蘭と庭石触れ合うてをり（山本一步）

*2

子の名呼ぶ春も雲の沖へ呼ぶ（長瀬雅）
春雲棹を頼みに吾子捜す
わだつみの声なき声に花散れる
電灯の紐余震計四月馬鹿
桜葉降る何も彼も見尽くして

*3

馬酔木咲く鼬川沿ひ歩け歩け（梅津大八）
荒北風や錨を深く氷川丸（銀林春生）
ランドマークタワーも墓標彼岸晴（大関洋）
諍ひの跡は残さず鴨の水（北登猛）
秋を惜しむために来てゐる港かな（山本一步）

*4

遠山に日の当りたる枯野かな（高浜虚子）
白樺を幽かに霧のゆく音か（水原秋桜子）
吹きおこる秋風鶴を歩ましむ（石田波郷）
泉やさし旅果の掌は泳がせて（小林康治）
くるがねの秋の風鈴鳴りにけり（飯田蛇笏）
どの子にも涼しく風の吹く日かな（飯田龍太）
長き長城春曉の貨車なつかしき（加藤楸邨）
ピストルがプールの硬き面にひびき（山口誓子）

*5

蛇 坂井信夫

一九八九年一月七日、午前六時三三分、東京駅発
高尾行の快速電車は満員の乗客をのせて発車した。
まもなく車掌室のドアが開くと白い蛇のあたまが
現れ、まっかな舌をのぞかせながら乗客たちの足
もとを這いはじめた。だが誰ひとり悲鳴をあげよ
うとしない。ただ吊革にしがみついたまま声を吞
んで蛇が通りすぎるのを待っているだけだ。白い
うろこが男たち女たちの足を擦ってゆくと、かれ
らはいちように額に脂汗をうかべ、じつと耐えて
いる。座っている者たちは雑誌や新聞を読むふり
をしているが、眼のすみを白いものがゆっくり移
動してゆくの恐怖のなかでちらつと見た。あと
は眠っているかタヌキ寝入りをしているかだ。蛇
のあたまが一輛めと二輛めのあいだに突入したと
き、ようやく車掌室から尻尾がぬけだした。かれ
は連結器のところで鎌首をもたげると赤い舌をち
ろとろ炎やしながら涙をながした。乗客たちはみ
んな新宿駅に着いたらわれさきに降りようと身が
まえていた。だが、なぜか電車はそのまま駅を通
過し、スピードをあげながら疾走しつづけている。
蛇は二輛めをせずに這いはじめ、男たち女たち
は無言のまま棒のように立ちすくみ、ひたすら白
い胴体が過ぎゆくのを待っている。叫びだそうと
する女の口を男の手がふさぐ。うろこが乗客たち
の足をさすり、ぶきみな感触が髪の毛のさきまで電
流みたいに走り、いつしか失禁しはじめている女
学生。男たち女たちは申しあわせたように、いつ
のまにかみんな眼をとじている。とつぜん天井の
車内拡声器から「眼がつぶれるぞ」という放送が
あり、それきりだ。蛇は三輛めから四輛めへと這

*6

蛇行 長田典子

今朝は
慌てて卵を割った
至む湖面とともに
フラッシュバックする
発破音が鈍く響いていた日々
谷に満ちてくる水から
逃避する蛇の幻影は
遠く
鱗を鋼に置換して
ホームに急行が滑り込む
蛇は身を振りながら湖面を泳ぎ
つゆくさ つりがねそう つるぎきよう
初夏の眉をなぞりながら
鶏小屋のまだ温かい卵へと向かう
蛇か わたしは 蛇なのだ
花首が揺れて
きつねのよめいり
高速で移動する窓を水が斜めに走る
歪んだ湖面から発破音の響く場所へ
瓦礫の隙間へ
わたしの卵を産み付けに行く
（詩集『清潔な獣』砂子屋書房、二〇一〇年）

■暑い夏の熱いシンポジウム

●シンポジウムに参加して 朝井恭子

猛暑のつづく夏の一日、横浜歌人会のシンポジウムが行われた。タイトルは「詩歌の現在―詩・俳句・川柳・短歌がめざすもの」と長い。表現者（と自分では思っている）の一人としては興味津津、好奇心がそえられる。趣旨は「ご活躍の詩人、俳人、川柳作家をお招きし四つの詩型の交流から詩歌の現在と目指すものを考えます。」と。こんなに刺激的で魅力的なシンポジウムが今迄あったろうか。求めている答えが見つかりそうな気がする……。

という訳で当日私は早めに家を出る。会場につくとすでに満席状態。会員の関心の高さを思わせた。

四人の作家の自作品や資料が配られる。

俳句や川柳は私にとって未知の分野である。しかし定型という点では共通しているので理解し易く、未知ではあるが異ではない。十七字の言葉が微妙な間を取りつつ韻き合い深い余情を生む俳句、「穿ち」の諧謔を中心にユニーク性を大切にする川柳。

お二人の作家が抄出した近詠は、現代生活を背景にした鋭角的でより感覚的な詩性を持っている。

現代詩は比喻やメタファーを用い、巧妙な修辭によって個性的な詩的空間を構築している。坂井信夫氏の「蛇」には都会生活上の閉塞感が伝わって来た。

短歌の吉野裕之氏は一歩踏み込んだ発言をする。身体の内から潜んでいた何かが時間を可視しながら形になったのが短歌であり、「先端的な表現を試みる」ことが表現。全体のプラスになると主張する。

暑い夏の熱いシンポはこうして幕を閉じた。私は宿題を出された中学生の心境で会場をあとにした。良き企画に拍手。

■企画続行！

●シンポジウムに参加して 佐久間裕子

短詩型文学に携わってきた私達は少なくとも、俳句、詩に関心がなかったとは言えない。私の先生水町京子に「歌が作れないときどうしたらよいでしょうか」と質問したことがある。余程おのれの才能に愛想がつきていたまだ初心のころのことであった。「そうね、わたしも困る時は歳時記をよみますよ」のお返事に救われた記憶がある。国文科の大学教授の先生が、であれば況や私はもつと俳句を知るべしと思った。短歌の情緒的かつ象徴の部分をかね持つ先生が俳句の自由な視点に注目されていたことも驚きであった。今回の研究会「詩・俳句・川柳・短歌がめざすもの」は、会員の他にも参加された方があり、関心の高さが伺えた。それに応える面白い企画であり、今後もこのシリーズでつづけて欲しいとの声が多かった。何故？ 何故だろう。短歌も俳句・川柳も定型の枠の中で文学性を追求しているのは変わりないけれど、短歌は俳句よりも十四文字多いところが口語に流れやすいことが気になることの一つであろうか。若い世代の短歌に口語が多いのは日常語だから当然来るべき時がきた訳で、十四文字が口語短歌にかなり貢献している。

短歌の権威主義と美学、権威と言っていけなければ歴史的背景と言うべきかもしれないけれど、世の中は動いている。新しい感性は生活の中から生まれてくる。やはり何を歌うかと言えば、真実と美学かなと思う。「実相観入」の実は事実だけでなく真実の実であるから。口語でも文語でもいい。俳句でも短歌でもいい。そして「なぜ短歌なのか」を求めてゆきたい。

■第十七回横浜歌人会研究会に参加して

●シンポジウムに参加して 田谷幸子

七月三十一日に開かれた横浜歌人会の研究会は、「詩歌の現在―詩・俳句・川柳・短歌がめざすもの」というテーマで現在第一線で活躍されている詩人・俳人・川柳作家をお招きし、短歌とともに四つの詩型の話を一度に聞く事の出来る画期的な会であった。四人のシンポジストの話された中で印象に残っている言葉を二、三拾ってみる。

*俳句・山本一步氏（横浜俳話会会長）

「俳句は入るのは易しいが終着点はどこだろう。俳句を好きと自己暗示をかけること。」

*川柳・二宮茂男氏（横浜文芸懇話会幹事）

「川柳は『穿ち』である。心象世界を多かれ少なかれ詠み込む。」

*詩・坂井信夫氏（横浜詩人会前会長）

「花が咲いたなどは末梢的なことで、土の中の根っこから養分を取って木となり花が咲く。人間とは何か、人間の生き様など根っこが大切。」

*短歌・吉野裕之氏（横浜歌人会副代表委員）

「千三百年の歴史の中で鍛え上げた五七五七七の韻律のしたたかさ。詩歌の役割はメッセージではない。など……」

その後、千々和久幸コーディネーターによる討論会となり横浜への拘り、震災の話など活発な意見が飛び交ったが、些か時間が足りなかったのが残念であった。

出席者七十七名。今回の企画は大変よかった。作歌の上でも参考になった。またこういう企画をしてほしいなどという嬉しい意見も直接耳に入った。

■ようやく根付いた丘の上

●新入会員自己紹介 工藤こずゑ

初めまして！「笛の会」に所属する工藤こずゑです。大学四年の冬、研究会顧問の岡野弘彦教授が「人」を結成した時に短歌を始めました。それから三十八年、短歌の傍にいる計算になります。

私は茨城生まれですが、転勤族の父に従って東京を振り出しに、熊本、東京経由で盛岡、仙台と渡り歩き、幼稚園二つ、小学校五校、中学二校という転校記録を持っています。ですから故郷と呼べるほど長く育まれた土地がありません。幼少期に毎年の夏を過ごした母の実家の茨城が辛うじて「私の田舎」と言えるでしょう。

と言うわけで、生まれてから一番長く住んでいるのは、この横浜で、結婚以来三十五年になります。住まいは神奈川区。港北区に接する丘の上で、日々のお使いをする有名な六角橋商店街とは、風の強さが少々違います。台所の窓を開けると富士、丹沢がまっすぐに見えて、同じくらいの高みに居るような気がすることがあります。晴れた日は富士山に沈む夕日を浴びながら米を研ぐ贅沢な主婦です。

うちの門前には樺の木があります。新婚の頃のある日、庭に生えてきたもので、その小さな葉が愛しくて門前に移植したところ、いまや大木に育ち大きな木陰を作ってくれています。時々見上げては、この場所に長く住んでいることの不思議を思います。実生が大木になるまでを見ているということが同じ場所で暮らしていることの実感となつて、私に感興を与えてくれているのです。

取留めのないことを取留めなく考えている者ですが、どうぞ、よろしくお願い致します。

■短歌との出会い

●新入会員自己紹介 後藤恵市

はじめまして。この度、横浜歌人会に入会させて頂きました後藤恵市と申します。千葉県から横浜市金沢区に転居して五年程になります。所属結社は日本歌人ですが、その他二つほど超結社のサークルにも参加していますし、また県及び金沢区の歌人会にも入会しています。

年だけは既に五十九歳ですが、歌歴はそれほど長くはなく、せいぜい十五年弱です。若い頃は安部公房、倉橋由美子、ベケットなどの小説や現代詩には夢中でしたが、短歌をやってみようか、などとは全く考えたこともありませんでした。学生時代にも「短歌研究会」なるサークルがあることぐらいは知っていましたが、せいぜい茶道部とか花道部などの親戚か何かだろうと思っていました（すいません）。

以上のように文化レベルの低い私ですが、何故短歌を始めたかといいますと、前登志夫氏の『非在』（短歌新聞社〈現代歌人叢書〉、一九七六年）という印象的なタイトルの歌集に偶然出会い、夢中で読み始め、その魅力にぐいぐい引き込まれてしまったからです。この歌集の読後、私の人生で短歌をやらないうという選択肢はなくなりました。まあ人生なんて、ちょっとした偶然の積分値なんでしょう。

今後の抱負ですが、もう少しで会社も定年になりますので、来年からは今まであまり読めなかった本を、歌集や歌論集に限らず幅広く読んでみたいと考えています。何もせずに酒浸りの生活に陥らない為にもノルマを決めて読書したいと思っています。また、結社誌の編集作業にももっと精を出して、地域の短歌会にも、できる範囲で貢献したいと考えています。

■横浜に住んで

●新入会員自己紹介 三枝むつみ

十月会の先輩の千々和久幸さん、山本登志枝さんのご紹介で入会いたしました。

横浜に住んで三十一年が経ちます。初めの二十二年間は、神奈川区の丘に住み、子供の手を引いてベイブリッジが出来あがっていくのを遠く眺めていました。現在は旭区のやはり丘の上に越して十年が過ぎました。ランドマークタワーが遥か小さく見え、あそこから海、と思い暮らしています。長野県に生まれ育ちましたので海に憧れるのでしょうか。

短歌を作り始めたのは十六年前です。縁あって春日真木子短歌教室に通いその後は「水甕」に所属しています。同世代の会員と同人誌「鮎」を結成、代表を務めています。己がじしを掲げる「水甕」ですが、殊に春日先生は伸び伸びと育ててくださいました。先生が作歌を始められたのは中城ふみ子が脚光を浴びている時期、その影響を受けていますので、思いを述べるというだけではない、方法意識の高い歌人です。言葉と言葉を組んで三十一文字の詩形に如何に奥深いものを言い表せるかを学んできました。短歌を読み取る力は大分付いてきましたが、作歌は中々上達の難しい事を実感しています。

昨年、第一歌集『カドミウム・レッド』（ながらみ書房）を出版いたしました。十五年をひとつの区切りに、自分の歌を見つめ直す契機となったかと思っています。

「水甕」は再来年が創立一〇〇年を迎えます。百年目に居合わせ、編集委員の任にあるのも不思議の糸に導かれているのでしょうか。目下、会員を挙げて百年の検証をするべく準備をしています。

会員歌集紹介

清水正子歌集『彗星番人』

津金規雄

『彗星番人』は、コスモス所属の清水正子さんの十一年ぶりの第四歌集で、六十代から七十代にかけての作品四七八首が収められている。現在選者を務めておられるので、選歌・編集はみずからの手で行われたのだと思う。

ユニークなタイトルからもわかるとおり、清水さんは宇宙への関心が強く、それらを詠んだ作品が多いのがこの歌集の特徴の一つとなっている。

レンズへだてわれに迫れる赤らがほ酒神バツカス
もどきの火星

星雲や星団などのカタログを作せるメシエは彗星
番人

遙かな宇宙へ思いを馳せるといふ姿勢は、さりげない日々のひとこまを取り上げてみても、そこにくつきりとした個性の刻印をもたらすことになる。

映像の海にイルカの泳ぎあて診察待ちの時間濃く
過ぐ

ここでの海は、いわば地球レベルでの遙かなるものといつてよいだろうが、旅行詠をふくめて海に取材した作品が少なくない。

くわんおんの涙のいろに青く澄むかつて捕鯨の基

地なりし海

こころにも航跡ひきてサイパンの沖をゆくいまわれ黙祷す

右に掲げた二首は海を詠むとともに、そこにぎざまれた歴史が読者のこころを遙かな時間のかたとへといざなう。どちらにも巧みな比喩が用られているが、これもまた本歌集を特徴づけている。

発行 行 終書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町一
四二ー二二 村上ビル 電話 03-3291-6548

発行日 二〇一一年七月三〇日
定価 二七〇〇円（税込み）

*

千々と久幸歌集『水の駅』

渡辺礼比子

「香蘭」代表である著者の第五歌集。二〇〇六年春以降の四五〇首を収録する。

漂える水遠く行きいつの日か眩しき駅に帰りを
来ん ①

巻頭の作品。福岡県遠賀川の上流に育った作者にとつて、美しい水の流れは「憧れであり、救いであった」と、あとがきにある。

夢のふちに茅蜩の鳴き亡き父を追いて未明の川く
だり行く ②

枕木の上帰りゆく学帽がいつか菜の花の奥へ消え
たり ③

歌われているのは、等身大の過去というより、詩人の顔を併せ持つ作者によって、詩的に再構成され

たこだわりの風景だ。②と③には彼の原点にあるロマンチズムが色濃く反映されている。

あの人の美しい脚 そうあれば歳月だったと今に
思うも ④

「歳月」は、「ゆきてかえらぬもの」の象徴であろうか。④の斬新な表現の裏には、齢を重ね、挽歌を詠み継いできた作者の無常観も透けて見える。

嫌われし卵は夜のみぞおちを声上ぐるなく墮ちて
行きたり ⑤

人を待つとき手に触れてゆるみたる輪ゴム一本ポ
ケットより出す ⑥

従来の作品に顕著だった反骨精神、切味鋭い諧謔は今も健在だが、自己の内面をシビアに凝視した⑤や、或いは日常のトリビアをさらりと掬ってみせた⑥に千々と久幸の新たな魅力を発見した。

発行 行 短歌新聞社

〒166-8555 東京都杉並区高円寺南四ー四三
一 九 電話 03-3312-9185

発行日 平成二十三年六月二十五日
定価 二五〇〇円（本体二三八一円＋税）

*横浜歌人会総会・新春歌会のご案内

・日時 平成24年1月29日（日）午後1時
・会場 馬車道十番館（関内駅下車徒歩3分）
・内容 ①

- ① 横浜歌人会総会
- ② 新春歌会
- ③ 懇親会

詳細は後日お送りする案内をご覧ください。

横浜に思うこと

●横浜エッセイ 井澤幸恵

先日、みなとみらいで映画をダブルで観た。朝一にもかかわらず一番前の席しか空いていなかった。ちなみに題名は「ゴーストライター」。月初めの一日は映画の日であるためか映画館にはたくさんの方がいて驚きそしてうれしくなった。

次の映画は夕方からなので晩夏の日差しの街を歩く。高層ビルが林立しているが空地がそこそこに残り種をびっしりつけた雑草が風に揺れる。大きな空にはすでに秋の雲。先進型の都市の美観が整う前の今が一番美しいのではないかと思いつながら眺めた。完成したらビルが連なるだけで港の気配も遠のいてしまうだろう。どこを見ても高層ビルとビルに切り取られたぎくしゃくした空になったら味気ない。

計画的に造られたこの街が匂いや臭いを持ち有機的に動き始めるにはどのくらいの歳月が必要であろうかとも思った。表と裏、昼と夜の街が交錯し混じりあって初めて横浜の魅力ある街の顔になってくる。横浜の顔？ モダンでどこか泥臭い港町になれば最高だなとじりじりと照りつける陽をあびながらぶらぶらと行く。

夕方のシネコンは混んでいたが観たい映画は空いていた。夫のため息がうるさい。二本観るのは疲れた飽きたという意味表示だ。終わって外へ出ると夜の部をめざして続々と人が集って来る。

みなとみらいの夜景はきれいだが、どこかよそよそしい。空中に灯はともっているが足元は暗い。沈黙していた海が闇をひろげ人間の存在をひっきりと包みこもうとしているようだ。

遺伝子の街

●横浜エッセイ 鳴海 有

横浜は、わたしの遺伝子の中に刷り込まれた街、そして今も住み、たぶんここに骨を埋めるであろう街である。・・昭和三十年代の横浜市中区で産湯を使い、日夜港の汽笛を子守歌として育った私を含め、祖父の代から三代にわたり中区に住んだ私の一族は今も母と妹が中区尾上町、そして私は本牧に居を定めている。昭和三十年代当時は、京浜東北の終点は桜木町であった。其処から、麦田にあった自宅までの足は、父の通勤、母の所用すべて市電であった。私は当時の子供料金で、横浜駅付近から自宅まで、十五円くらいで乗れた記憶がある。京浜東北が、桜木町以南、関内、石川町、山手を経て根岸、磯子まで開通した頃、市民の愛したそれまでの足である市電は、高度経済成長の進行とともに、ひっそりとその姿を消した。・・麦田、柏葉等々の石川町トンネル付近の町々の町名にも、開港以前は寒村であった横浜市中区の土地土地の実際が反映されていた事を、祖父はよく記憶していた。麦田の近くに鷺山という処があるが、ここには実際に多くの鷺が住み、特に夜半や明け方に鳴く五位鷺の声はうるさい程のものだった、と祖父は語ったものだ。いまや、中区も全域にわたって開発されてしまい、当時の面影を残す丘陵や森、雑木林のたぐいも少しづつ目減りしてしまっているが、どうかこうした、由来ある地名が開発とともに根絶されてしまわぬことを祈りたい。・・わたしの思う、まったく横浜は、もしかするとともはや、半世紀近く前の思い出の中にしか存在しないかも知れぬ。

◇新会員の紹介

・米長 保（現短歌）

推薦者Ⅱ清水鉄次郎、小野政男

・新田 由美子（塔）

推薦者Ⅱ千々和久幸、小島熱子

入会については、横浜歌人会会則をご覧ください。
会則はホームページでもご覧いただけます。

<http://yokohama-kk.web.infoseek.co.jp/>

◇告知板

会員の歌集・歌書をホームページや会報でご案内します。出版時に会員の方で、二〇一一年二月一日以降に出版された歌集・歌書が対象となります。対象となる方は、左記事務局宛てにご一報ください。

横浜歌人会会報 第102号

発行日 二〇一一年十月十五日

編集人 長野 義和

発行人 千々和久幸

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-kk.web.infoseek.co.jp/>

振替口座 00200-5-77630

制作 アトリエ云 / 印刷 野崎印刷紙器株式会社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。